持続可能な森林経営研究会
http://sfmw.net/

森林施業の問題点等に関するアンケート調査

森林施業に係る以下の各課題について、最も重要な問題点や課題、そのための対応策等についてご意見をお聞かせ下さい。なお、ご参考までにセミナーで議論された主なテーマを文末に整理いたしました。また、ホームページのセミナー報告（http://www.sfmw.net/sub3.html）にも議論の内容を公開しております。

課題１　森林情報の把握、内容、取り扱いについての問題点と対応

日本の森林の将来を考えるに当たって、所有の形態、森林資源、施業の履歴と現況、自然環境の状況などを一定の類型的な区分によって、収集・整備していくことが重要である。

その際に類型区分となるのは、今までのように、都道府県ではなく、たとえば流域管理システムのような将来を見据えた新しい区分であることが望まれる。

森林情報を収集・整備していく手段としては、ＧＩＳ，モニタリング、ＩＴ化などが活躍している。それらの特色を生かして有機的にリンクさせるとともに、森林簿やモニタリング調査を基にして、地球温暖化問題の対応を図った国家森林資源データベースのダイナミックな活用をはかるべきである。

課題２　標とされている森林施業のあり方に関する問題点と対応

愛媛県久万町の篤林家岡信一氏は、大径木生産や複層林の施業は、そんなに生易しいものではないと主張している。

彼はお祖父さん、お父さん、本人の三代に亘って合計１００年以上もの現場での教育を受けている。しかし、岡氏親子は、現場での実学とともに、高知大学・愛媛大学が自分の家の林地で間伐や枝打ち前後の照度試験を行うことに協力してきた。つまり、経験だけでなく、科学的な裏づけを採ってきた。そのことが技術を普遍化することに繋がっている。

さらに試験研究機関と協力して「林木密度管理図」や「育林技術体系」を作成している。「育林技術体系」は、岡家の育林技術で一般化できるものを分かりやすく一枚の表に纏めたものである。この表とその林業研修によって、久万町全体が優良木を生産する、美しい林業地に育っている。

このことは、地域における森林施業のあり方を物語っていないだろうか。

課題3　森林計画の体系、内容等に関する問題点と対応

これからの林業とはいったい何だろうかという、論議が必要になっているのではないだろうか。

木材や林産物の生産、森林の整備などのほかに、山村を維持するための仕事を林業側が引き受けなければならない時代が来るだろう。限界集落の問題はその象徴といえる。

また、野性動物の対処に自然保護側と林業側がともに対策を講じたり、自然環境や暮らしの平和を維持するためのパトロール等の新しい仕事も生じて来るであろう。

課題4　森林計画の実行、森林施業の実行に関する問題点と対応

国民は、日本には森林計画制度というものがあり、それによって森林の施業を計画的に行おうとしている。ということを知っているだろうか。ほとんどの人が知らないだろう。

かって、林業関係者の間では、森林計画制度は世界に冠たる森林政策だと言うことが誇らしげに言われてきた。資本主義の国でありながら、計画的に施業を行っており、年間成長量以上に伐採することはありえない。「伐ったら植える」は、山林所有者の倫理観であり、鉄則である。こんな国は、世界広しといえども日本しかない。

それが最近では、木材代金が安くて造林費用が出ないのだから、再植林しなくたって仕方が無いではないか。日本は森林帯に位置しているのだから、木を植えなくてもいずれ、森はできる。それを天然林だと思えばいいではないか。これを開き直りの論理というのかもしれない。

これに対し、採算が合わないというのなら、伐らなければいいではないか。過去に苗木代から、造林費用、林道作設費、間伐費用等について国民の税金から多額の助成が出ている

のは、そういう時でも経営を持続して欲しいがためである。こういう反論や批判は、まもなく必ず国民側から出てくるものと思われる。

今の内に、森林計画制度を国民の側から見ることをしておくべきだと思う。
その意味で、白石理論は、大変時宜にあったものだと思う。

課題５　その他（自由にご意見を）

結論は出来るだけシンプルなものにすべきだと思う。
問題３・４については、必ずしも、仕分けどうりの答えになっていないと思います。